

教えの庭から

4年くらい前から、新型コロナウイルスの感染急拡大で、葬儀会場での互いの感染防止をするため事前焼香という新しい葬儀のスタイルが行われてきています。事前焼香とは、葬儀が始まる前に、一般参列者の方々には焼香やお別れをしていただき(通常、10分もあればできます)、本番の葬儀には親族・遺族の参列を中心とした家族葬で行うというものです。

この方式で行うと感染予防になり、一般参列者は安心してお参りできます。「簡単でいい。葬儀出席のハードルが下がった」などと評価する声もあります。しかし、短時間で故人とお別れをしますし、葬儀やその後の弔辞・喪主の挨拶を聞くこともないので、「もつと

葬儀での事前焼香に思う

出雲市斐川町・仁照寺住職 江角 弘道

心を込めて送りたい」「寂しすぎる」という感想を抱く人もあります。僧侶側から見ますと、参列者が極端に低くなってきたり、また注意は必要ですが、



挿絵 平尾恵郷

に少なくなつて、寂しい葬儀であると感じています。葬儀は、亡くなられた人症の位置付けは、令和5年

5月8日から「5類感染症」になりまし。感染の心配が低くなつてきています。従来は、事後に焼香して、臨済宗の葬儀は、亡くなられた方が、まづある事前焼香の方式は、現状では元に戻すこと、導師の引導により、成す。そこで、「もつと心を仏する」という儀式です。引込めて送りたい」という一導法語では、まず生前の功績を称え、お別れの言葉を述べます。そして、最後に臨済宗の教えを示す「喝」を導師が唱え、故人に永遠なる仏の命を吹き込みます。導師の引導が終わった後に、喪主、親族・遺族として、一般会葬者の順で焼香をしていました。

「一人の生を受くるは難く、やがて死すべきものの、いま命あるは有り難し」といまだ成仏していないのに、焼香をするので、焼香の本来的意味(成仏した故人に抹香の香りをお供えし冥福を祈る)から外れることになり。これを本来の焼香の姿に戻して、故人に真心をもって香をお供えすれば、同時にその功德によって、自分も良き心根が養われ、教えていただいたのです。